移植医療支援室開設にあたり

臼井ゆかり＊

1.はじめに

私は平成15年から平成19年までの5年間、移植医療に関わらせていただき、そのうち4年間は神奈川県臓器移植コーディネーターとして、自施設を含めた神奈川県内の医療機関を中心に臓器移植体制整備や臓器提供発生時における提供施設の調整的役割を担ってきた。それまで全く移植医療の知識も経験もなく突然移植医療の世界に入った私は、移植医療の複雑さに自問自答し、「あくまでも目の前のできること、少しでも状況を良くしていくことにエネルギーを注ぐしかない」と自分に言い聞かせながら、毎日を送っていたのを記憶している。

私は主にドナー側に関わってきた経験から移植医療支援室の開設について述べたい。

2.移植医療に関わって

移植医療は、先端医療であるがゆえに特殊的な倫理性と社会性を持ち、多職種のチーム医療体制がなければ成り立たない。その上患者家族を含め医療者は「提供側」と「移植側」とに二分化されており、この異なる立場の者が自分の立場と役割分担を誤解の無いように互いに理解し、自分の価値観と信念だけに基づいた意見を他人に押しつけることのない心がけが必要とされる複雑な人間関係の構成を持つ。まして、臓器、組織提供は、院内に限らず他施設のスタッフも含めた多職種の集団によって展開されるため、チーム医療に係わる多くの問題も生じやすい。特に提供から移植に至るまでには、医師や看護師ばかりでなく、各臓器、組織の移植コーディネーターや行政機関など多数のスタッフが緊急要請され、切迫した時間の中で一同に対応にあたることから否応にして現場は入り乱れ、関わる医療者がこれらの複雑さに惑わされて「何のためにこれをしているのだろう」ということさえ忘れてしまう危険性も潜んでいる。

我が国の移植医療は、和田心臓移植という歴史的背景も含め「密室の医療」と敬遠され社会的に医療不信に陥った経緯や臓器提供のシステム事情による提供側の過剰負担の問題から、次第に「これは救急医療(提供)に係わることだから移植側は関与すべきでない」「これは移植医療(移植)に係わることだから救急側は関与すべきでない」など、必然的に提供側と移植側の希薄化した人間関係ができてしまったように思われる。こういった現象はともすれば医療者個人の価値観で医療が展開されてしまうことも懸念されなければならない。当院でも関連部門が共通する問題意識を持ちながらも、なかなか部門間の連携が図れず独自構成で行ってきたことから非合理的で医療安全面に関連する問題も数々生じ、地域における移植医療の基

＊北里大学病院　看護部 教育担当
元神奈川県臓器移植コーディネーター

幹病院としての取り組みも後退していた時期がある。これらの状況を打開するためにはどのようにすればよいのか。それには、関わる者が当院の理念にも共通する「誰のための移植医療なのか」の原点に戻る必要性を痛切に感じた。

3. 一体化した取り組みの必要性

当院の理念である「患者中心の医療」「共に創り出す医療」の実践を目指すには、「提供と移植」、「臓器と組織」の分業化ではなく、移植医療に関わる医療者一人一人がこれまでの歴史的変遷を真摯に受け止め、一つの医療として「提供側」と「移植側」、「臓器」と「組織」の互いの立場の垣根を越えた協働関係の構築が最優先であると考えたが、当時はそのような考えを受け入れられる風潮ではなく、大半は「互いに関わるべきでない」という雰囲気が漂っていた。しかし、移植医療に携わるスタッフの地道な活動もあって、病院執行部から念願の移植医療支援室開設の認可が降り、「提供側」と「移植側」の双方の連携と点在化した問題を集結し問題解決を図る新たな移植医療体制の構築を目的とした全国でも数少ない部署が誕生した。当院の理念が、これまでの移植医療の常識を変え、移植医療支援室開設の原動力になったのではないかと思っている。

だが、開設前後は紆余曲折の繰り返しであった。これまでの移植医療に対する根強い負のイメージが根底にあるため、通常の医療であれば当たり前にされていることが移植医療となると実践以前に受け入れられるまでに時間を要することも多々あり、物事は容易に進んでいかなかった。関係者間でも部門別に専門的な主張が強調され運営目標の共有を困難にし連携が上手くいかず、一瞬にして関係性が崩れたことも経験したが、移植医療支援室の開設は協議や議論を通して部門間の意思疎通を円滑に出来る基盤となり、これまでタブー視されて埋もれていた問題を明らかにすることに繋がったと思っている。そして、部門ごとの志気の向上や新たな体制構築の上で意味あるものになっていると信じている。

これまで、我が国は移植医療が進まないだろうかと様々な議論がされ、2009年7月「臓器の移植に関する法律」が12年ぶりの改正で、新たな一歩を踏み出した。今後さらなる臓器・組織提供の発展に期待をよせられているが、「脳死議論」「救急医療や小児医療の体制」「提供施設の負担軽減」「提供された遺族のケア」「移植コーディネーター養成のあり方」など課題は山積みである。しかし、これらの複雑な問題に立ちはだかった時、当院の移植医療支援室は「誰のための移植医療なのか」の原点に立ち戻して問題解決を図ることができ、院内のみならず地域に対しても新たな移植医療の取り組みを発信できる部署であると思っている。

最後に人と人との関わりの温かさと重要性を身にしみて感じ、沢山の方々にご指導とご支援をいただいたことに深く感謝したい。